

小学校におけるコーチング活用の可能性

指導主事 春名久雄
Haruna Hisao

要 旨

コーチングは、スキルである前に「人間観」であると言われる。相手の能力や可能性を信じ、考えや行動に共感し、共に向上する方向を目指す考え方は、人間形成の土台を育成する役割を担う小学校教師には、とりわけ必要不可欠な教育スキルとなる。児童支援の在り方をコーチングの側面から考え、教育現場における実践的な活用の方途を探った。

キーワード： 指導と支援、教師力、コーチング、コーチングカード

1 はじめに

社会に流出する情報量は、10年前とは比較にならないほど多く、保護者の価値観も多様に変容した。それは、人と人とのコミュニケーションの有様にも色濃く反映し、子どもたちの生活にも記号化した言語が溢れ出している。

こうした社会背景にあって、教師もこれまでの教職経験だけでは子どもと良好なコミュニケーションをとることが難しくなっている。教職経験が長い教師ほど、大きな学級崩壊に至るといふ報告もある。積み重ねてきた教職経験が通用しなくなった教師の焦燥感や不安感はいかばかりだろう。新しい時代展開に見合った教師力が求められている。

2 研究目的

小学校におけるコーチング活用の可能性について研究する。

3 研究方法

- (1) 小学校児童に対する指導と支援の在り方をコーチングの側面から考察する。
- (2) 教師の対児童アプローチをコーチングスキルとして活用する方途を探る。

4 研究内容

(1) 指導と支援

一時期、教育現場では、「指導」と「支援」についての論議が賑やかになったことがある。論議の争点は、教師の教育行為が、教師からの一方的かつ強圧的で子どもの自主性を損なうものであってはならないとする「学び」にかかわるとらえ方の問題である。「指導」には「押し付け」があるとして、かなり極端な使い方としては、すべての文書から「指導」をすべて「支援」に、「助言や指示」を「提示」に置き換えるような事例もあった。

もちろん、学習指導要領「総則」や各教科の解説でも、「指導」を「支援」に置き換えるなどと記述されてはいない。要は、教師の意識にある「用語」の概念が論議を生み出したのであるが、「指導」であれ、「支援」であれ、教育行為が子どもの自主性を尊重して為されなければならないことは当然である。教えること、気付かせ考えさせること、助言したり指示したりすること、援助や手助けをすること、ほめたり注意したりすること等の教育行為は、すべて「指導」の領域に含まれていることであり、それらをねらいや場面に応じて適切に使い分けていくことが大事で、

そういう諸々の教育行為の中から、あえて「支援」だけを抽出し、過去の優れた教育行為を全否定するような考え方が生まれたのは残念なことであった。すなわち、教師は、教えたり助言したりしてはいけない、子どものしたいことを認め、教師は子どもの後押しをする役割に徹すべき、という極端な考え方に基づく教育行為が、過去の優れた教育実践をも顧みない独善に陥ったのは、教育にとってかなりのマイナスであったと言える。「指導」と「支援」は、一体となった教育行為であり、互いに対立するものではない。

(2) ティーチとコーチ

教育行為における「指導」と「支援」の必要性は、従来も今後も一貫して変わらない。しかし、「指導」と「支援」という「用語」から想起する教育行為のとらえ方に、うち解けないものがあるとすると、「指導」を「ティーチ」、「支援」を「コーチ」と読み替えて「学び」のプロセスを理解してはどうかと提案する。

(3) コーチングとは何か

ア コーチングの誕生経緯

もともとコーチとは、馬車のことを指した。大切な人を望む場所まで安全に送り届ける役割、転じて現代的な意味をもつコーチになった。コーチは、主にスポーツ界でその役割を果たし、なくてはならない存在となっている。これがマネジメント分野で脚光を浴びるようになったのは、1970年代後半、ハーバード大の教育学者でテニスの専門家であるティモシー・ガルウェイのスポーツにおけるコーチング理論が大きな実績を上げ、ガルウェイに学んだイギリスのジョン・ウィットモアらが、マネジメント分野へのスポーツコーチングの手法を取り入れた訓練法を提唱したことに端を発している。更に1990年代に入って、コーチングは、アメリカの企業経営者や管理職の間で一大ブームを呼び、企業の人材教育にコーチングが優れたマネジメントツールとして欠かせないものとして評価されるに至った。日本での一般認知は、先のウィットモアの著書から始まるが、コーチングの考え方は企業ばかりでなく、対話が不可欠な現場である医療や教育など、業種や役職や世代を超えて広がっている感がある。以上がコーチング誕生経緯の概略である。

イ コーチングの哲学

コーチングは、ビジネスにおけるコミュニケーションスキルとしての実践的理論を積み上げてきた。その目的の中心は、企業の人材育成である。組織におけるコミュニケーションを活性化させ、営業実績に反映させるための効果的なツールとして、コーチングは活用されている。

コーチングには、「人には無限の可能性がある」「その人が必要とする答えはその人の中にある」という、基本となる二つの哲学が存在する。

コーチングは、誰もが使える「コミュニケーションスキル」であり、スキルの取得は訓練によって達成されるが、その訓練のベースには、上記の哲学、すなわち「人間観」がなくてはならない。このことは、教育者である教師に不可欠の哲学である。「人は在るがままで存在する価値がある」という教育の原点にも通じる考え方は、コーチングを始めるスタートラインの考え方でもある。

教師は、いかなる場面でも、子どもの可能性を信じ、その成長をサポートしなければならない。子どもが自立するためには、「教える」だけでなく「引き出す」ことが重要だ（図1）。

教師のティーチとコーチの使い分けを主観的・感覚的なものから、客観的・意識的なアクションに移行することで、教育効果はずいぶん違ったものになる。

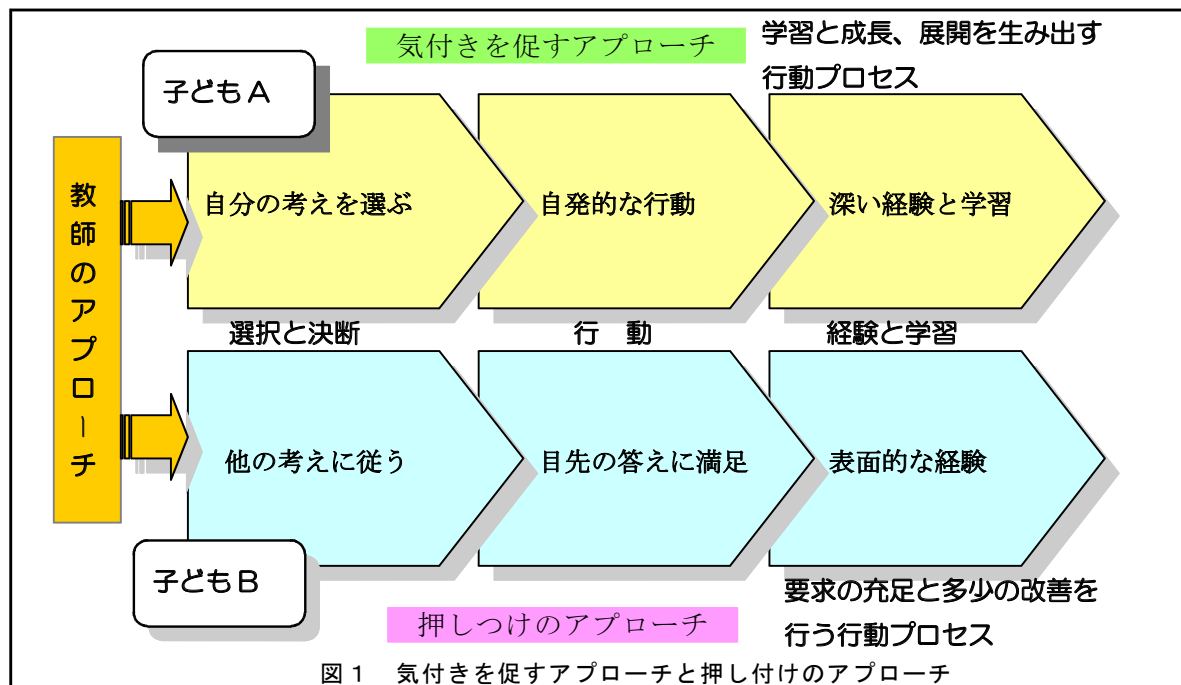
(4) 教師力

教師が必要とする能力にはどのようなものがあるか、考えてみた。

①多角的な視点、②直感力、③受容心、④引き出す力、⑤分析力、⑥伝達力、⑦チャレンジ精神、⑧コミュニケーション力、⑨内省力、⑩展望する力、⑪決断力、⑫教育観、等が挙げられる。

むろん、これらすべてを満たす力量を備えることは、教師にとって目標ではあるが、ハードルも高い。これらの力の獲得には、教師である前に人間としての鍛錬が必要な部分が多いからであ

る。教師も生身の人間であるから、未熟な部分は多々ある。そのことを承知した上でも、プロとしての教師力を高める努力を怠ることはできない。教師自らにすべての人間力が備わっていなくても、子どもには理想を追い求めるアプローチが必要であり、そこに教育の可能性がある。コーチングの存在価値は、教師力の限界が子どもの可能性の限界ではないことを実証し得るものでなければならない。



(5) コーチングへの物差し（教育行為の視点）

「学び」を補完する力＝コーチングは、指導者に明確な目的意識がなければ、子どもを漂流させかねない。コーチングは、子どもがしたいように、あるがままに放任することではない。「指導」意識のある「支援」がコーチングの重要なポイントである。

そこで、コーチングを始めるときの教育行為の視点を考えてみた（表1）。コーチングは子どもに向かうコミュニケーションスキルであると同時に、教師の内なる教師力を問い返すものであり、その視点を意識することでコーチングスキルは実践に即応するものになる。

表1 コーチングを始めるときの教育行為の視点（チェックポイント）

子どもへのコーチングポイント	教師力（内省と確認）
○成そうとする理由や目的が伝わったか	●理由や目的を明確にもっているか
○達成するイメージを描かせたか	●達成への道筋が描けているか
○実行への意欲を喚起できているか	●実行への熱意があるか
○実行への意志を引き出せているか	●実行への意志があるか
○教師の期待を伝えているか	●期待する内容を明確にもっているか
○タイミングは合っているか	●タイミングを測っているか
○何が伝わっているのか	●伝えた内容に間違いはないか
○何が伝わっていないのか	●伝わっていないことを理解しているか

(6) 小学校におけるコーチングの可能性

教育現場へのコーチング導入には大きな期待が寄せられているが、とりわけ小学校での教育活動へのコーチング導入は、教師の資質向上に寄与する可能性が大きい。小学校の教育活動におけるコーチングスキルの研究・開発は時間の問題であろうと考えている。それには、いくつかの理由がある。

ア 教科指導の特性

小学校の教師は基本的に全教科の指導技術をもっていなければならない。しかし、小学校教師といっても当然、得手不得手がある。それ故に、コーチングの効果的な活用が不可欠となる。

イ 教師の高年齢化

教師の高年齢化が進行し、体力で手本を示すような指導法が困難になってきており、それに代わる教師力が必要になっている。コーチングはまさにこのような状況で力を発揮する。

ウ 価値観の多様化

学級崩壊などで指摘されているように、世代の価値観が多様になり、これまで教師が積み重ねてきた経験や指導法が役に立たなくなっている状況がある。コーチングは相手の力を引き出す技術であるということに大きな魅力がある。

エ コミュニケーション力を高める

コミュニケーション力に乏しくなった現代っ子へのアプローチに、コーチングスキルの獲得は教師の即戦力になり得る。また、生徒指導やカウンセリングなどへの応用性も高い。

オ 保護者との信頼関係を築く

開かれた学校づくり推進の要は、保護者や地域住民との信頼関係を築くことにある。学級づくり、学校づくり、いずれも基本となるキーワードは「信頼」である。教師集団のコミュニケーション能力の向上は、「信頼」を勝ち取る有効なツールである。

(7) コーチングカードの活用と訓練法

教育現場での「気になること」について、メモをしておくことはよくある。しかし、そのときのコミュニケーションの取り方がどうであったかまでを確認し、改善案を自らに提起しておくことは少ない。下記のようなカードを活用し事例を収集することは、教師力を高めるコミュニケーションスキルを獲得する効果的な訓練の一方法であると考えた。

教科指導でのコーチング例	(導入段階のアプローチ)	T：教師 C：児童
気付きが少ない例	気付きや発見重視（コーチング応用）	教師力（教師の内省と確認）
T 今日は〇〇について学習します。 それは、・・・のように進めていきます。質問はありますか。 C …… T では、言われたとおりに始めてください。	T 今日は〇〇について行います。 こんな方法でやってみます。どんな準備が必要でしょう。 C (児童反応) T もっと工夫したらよいと思うことはありますか。(児童反応) T これを調べたらどういうことが分かるでしょう。(児童反応) T やってみたいことは。(児童反応) T なぜそう思ったの。(児童反応) T そういうことも考えられますね。 T まとめてみましょう。	○学びへの目的が明確であったか。 ○達成への道筋を示しているか。 ○行為への期待を投げかけたか。 ○実行への熱意を伝えているか。 ○展開へのタイミングはこれでよいか。 ○共感しつつ子どもと一緒に進められているか。 ○伝わっていることと、伝わっていないことを判断できているか。

教科指導でのコーチング例 (不得意教科でのアプローチ)		
気付きが少ない例	気付きや発見重視 (コーチング応用)	教師力 (教師の内省と確認)
<p>T 今日○○を描きましょう。さあ、始めて。</p> <p>C 先生、○○は何色を使ったらよいのですか。</p> <p>T ○○は～色。○○は～色を塗りましょう。</p>	<p>T 今日○○を描きましょう。</p> <p>T ○○について感じることを話してください。</p> <p>C (児童反応)</p> <p>T たくさん発見しましたね。では、色塗りを始めましょう。</p> <p>C 先生、○○は何色を使ったらよいのですか。</p> <p>T あなたは何色を塗ってみたいのかな。その絵の具にある色かな。</p> <p>C (児童反応)</p> <p>T 心配なら別の紙で試すとよいね。</p> <p>T 気に入った色ができましたか。</p> <p>T ○○さんはこんなきれいな色を作りましたよ。みなさんも工夫してごらん。</p>	<p>○学びへの目的が明確であったか。</p> <p>○行為への期待を投げかけたか。</p> <p>○達成への道筋を示しているか。</p> <p>○実行への熱意は伝わっているか。</p> <p>○展開へのタイミングはこれでよいか。</p> <p>○共感しつつ子どもと一緒に進められているか。</p>

生徒指導でのコーチング例・忘れ物 (問題行動でのアプローチ)		
改善が少ない例	改善への期待 (コーチング応用)	教師力 (教師の内省と確認)
<p>T ○○さん、また忘れ物ですか。</p> <p>C</p> <p>T あなたには、いつも言って聞かせているのに、どうして繰り返すの。</p> <p>C</p> <p>T 注意を受ける時間も、みんなに迷惑がかかっているんですよ。</p> <p>C</p> <p>T ごめんなさいぐらい言いなさい。</p> <p>C ごめんなさい</p>	<p>T ○○さん、忘れたのですか。</p> <p>T いまの気持ちはどうですか。</p> <p>C (児童反応・以下略)</p> <p>T そう、はずかしいのですね。</p> <p>T 忘れ物をした訳を考えてみましょう。</p> <p>T どうすればよかったのかな。</p> <p>T みなさんは工夫していることがありますか。あればその秘密を教えてくださいませんか。</p> <p>T いろいろあるのですね。○○さんには、どれかできることがありますか。</p> <p>T 実行するために先生がお手伝いできることはありますか。</p> <p>T では、がんばってください。すぐにはうまくいかないかも知れませんが期待しています。</p>	<p>○注意を喚起するタイミングはよかったか。</p> <p>○展開へのタイミングはこれでよいか。</p> <p>○達成への道筋を示しているか。</p> <p>○実行への熱意は伝わっているか。</p> <p>○共感しつつ子どもと一緒に進められているか。</p> <p>○行為への期待を投げかけたか。</p>

生徒指導でのコーチング例・日常会話 (会話のTPO理解へのアプローチ)		
気付きが少ない例	気付きや発見重視 (コーチング応用)	教師力 (教師の内省と確認)
<p>T ○○さん、これを職員室の教頭先生に届けてくれますか。</p>	<p>T ○○さん、これを職員室の教頭先生に届けてくれますか。</p>	<p>○明確な意志を伝えたか。</p>

C えーっ、めんどくさーい。	C えーっ、めんどくさーい。	
T 今、こんなことで先生、手が離せないからたのむよ。	T 今、こんなことで先生、手が離せないんだ。教頭先生が待っておられるから。もし、〇〇さんが先生と同じ立場だったらどうするかなあ。	○実行への熱意は伝わっているか。
C 分かったよ。		
C 教頭先生、これ。置いとくよ。	C 誰かに手伝って欲しい・・・かな。	
教頭 ちょっと待ちなさい。その口の利き方は何ですか。きちんと言い直しなさい。	T そういうこと。先生、助かるよ。	
C ……(持って行けて言われたから来てやっているのに何で怒られなきゃいけないんだ、もう。)	C 分かった。持って行くよ。	
	T ありがとうございます。じゃあ、教頭先生にどう言って渡そうか。	○共感しつつ子どもと一緒に進められているか。
	C 〇〇先生からの届け物です。	
	T そうだ。その前に君の名前とクラス名も一緒に言おう。おさらいしようか。	○行為への期待を投げかけたか。
	T 上出来だ。できるじゃない。	

5 研究結果と考察

県立教育研究所でコーチング研修講座を始めて2年。まだまだ教育現場での認知は少なく、これからという感拭えない。しかし、コミュニケーションスキルを教師力に取り入れ活用したいという声は、確実に広がっていくと確信する。これは、現代社会が抱えている重要かつ緊急の教育課題の一つであるからだ。コーチングは古くて新しい教育スキルである。小学校でも、子どもの目線で語るとか、まずは子どもの話をしっかり聞いてあげて・・・など、これまでも教育的配慮として実践されてきたものであり、それらはコーチングそのものであった。こうした教育的配慮の多くは、個々の教師の長い教職経験の蓄積から語られ実践化されてきたものである。しかし、経験への過信は、柔軟であるべき教育活動を硬直化させ、子どもたちとのコミュニケーションを逆に難しくしてしまうこともあった。教育現場では、大きな世代交代が目前に迫っている。コーチングスキルの獲得は、多様な教育環境を操舵しなければならないこれからの教師にとって、不可欠の教育技術となるに違いない。

今回、コーチングカードで紹介した事例は、小学校での日常の教育活動のほんの一例に過ぎない。多様なサンプルを収集することで、今後の研究がより実効性のあるものになると考える。

6 おわりに

時代は、カリスマ経営者や英雄的マネージャーを求めてはいない。むしろ、時代が求めるリーダーの条件とは、「人の可能性や才能を引き出す」能力が優れていることである。それは、教育現場における教師に求められる絶対的な条件でもある。教師のリーダーシップとは何か、コーチングの可能性にその答えを見いだしてみたい。

参考・引用文献

- | | | | |
|-------------------|------------|--------|------|
| (1) はじめのコーチング | ジョン・ウイットモア | ソフトバンク | 2003 |
| (2) カウンセラーのコーチング術 | 市毛恵子 | PHP | 2002 |
| (3) 教師力コーチング入門 | 河北隆子 | 明治図書 | 2004 |